

ぱびるす

『まごころ』

校長 殿村孝平

本を手にとるとき、その趣が気になる。たまたまいとおうか。本が「手に取ってほしい」と語りかけてくるようにも思える。一行、二行と読み進めていくと、また表紙を見つめよう。そんなことが何度かあった。

作家は、テーマを如何に読者に伝えるかで腐心する。伝えたいことを具体的にイメージさせる効果があるのが、本の装丁ではないかと考える。印刷された紙を、折り、綴じ、表紙付けをして書物の体裁を整えることを装丁というが、時には、この装丁を気に入って購入してしまうこともある。

夏目漱石の小説は数多くある。明治になる前年に生まれ大正五年に没した漱石。その時代背景を思い描きながらそれぞれの装丁を眺めるのが楽しい。私の蔵書に漱石の作品がいくつかある。その背表紙には、楷書、行書、草書、篆書



と様々な書体で題字が書かれている。また、漱石は篆刻もしたことだから、書道を専門と

第 27 号

香芝市真美ヶ丘 5-1-53

奈良県立 香芝高等学校

文化図書部

する私にとっては、とても親しみを感じる作家である。題字の工夫だけでなく、本全体の装丁にも工夫がある。中にはまだ封を開けられずにある本もあるほどである。

漱石の代表作といえる「まごころ」は、今も昔も高校の教科書に取り上げられている。本校でも二年生が三学期に学習をしていた。上中下からなる大作であるが、最後まで一気に読んでしまいたくなるところが優れた小説である証といえる。また、登場人物の名が、なぜ「K」なのか。いや、「K」だからおもしろいのだろう。

知り合いの高校二年生がこの小説を四コマ漫画で表していたので紹介をしたい。掲載したのは、上を四コマにしたものである。どの場面を取り上げ、どの言葉を書き込むのかに迷ったことであろう。「自分が捉えた『まごころ』は、こうですよ。」と表現するのは中々

難しいものである。みなさんであれば、どうしただろう。また、中や下はどうなるだろう。

う。想像を巡らせることは、何においても楽しいものである。一つ描いてみよう。



卒業生に贈る

この一冊

学年主任 藤井行久先生 『マンガで楽しむ古典 万葉集』 (井上さやか監修)

日本最古の歌集『万葉集』古典の授業で出合ったとき「なんだか堅苦しくて難しく、親しみにくいもの」という印象を抱きませんでしたか。

この本ではそんな『万葉集』の歌がわかりやすく、そして詳しく解説されています。

「万葉人」も私たちと同じ人間、恋もすれば、おいしいものも食べたい。たまにはゆつくり遊びたいと思う。そんな思いを共有し、「万葉人」も仰いだ「ふたかみやま」を望み、古代に思いを馳せてみてはどうでしょう。

☆☆☆ 三年一組 御神本真一先生 『コンビニ人間』 (村田沙耶香著)

こどもの頃から、普通でない考え方と行動をする主人公恵子。自分のどこが変なのか全くわからないものの、親に迷惑をかけるないように生きてきました。コンビニ人間」として、生まれ変わってから19年間コンビニでアルバイトとして働き続けました。そこで、自分の「存在」をしっかりと認識するようになります。

しかし、白石という男性と出会いその「存在」が分からなくなりますが。人間の生き方・居場所などを考えさせられる一冊です。

☆☆☆ 三年一組 森本俊雄先生 『You Tube 英語勉強法』 (本山勝寛著)

高校での3年間の英語学習はどうでしたか。この本では無料の英語教材であるYouTubeの英語動画をスマホやパソコンで繰り返し視聴し、生きた英語を自然に身につける多くのアイデアが満載です。1日30分英語シャワー、洋楽字幕歌唱、様々なジャンルの多聴、EnglishやEom COSTで検索視聴、映画字幕シャドーイング、英語ニュースVOA挑戦等です。英語をツールとして使いこなすことで人生は必ず大きく開けていきます。高校で習った英語を更に進化させ、世界中に友人を作りましょう。

☆☆☆ 三年二組 楳原章子先生 『お母さんの「あおいくま』』 (コロケ著)

「あせるな」「おこるな」「いばるな」「くさるな」「まけるな」の頭文字を取って「あおいくま」ものまね芸人、コロケさんを支えてきた言葉です。「母に教えられ、小さい頃から常に胸の中

とあります。 ☆☆☆ 三年六組 酒本美奈子先生 『地球の瞬間』 (リー・ベンデビッター・バル著)

ナショナルジオグラフィック社出版のこの本を手にしたのは二十年以上も前のことですが、ふとした時に眺めてみたくなります。大自然の驚異、野生生物の生態、人々の生活、戦争、貧困、祈りなど、一つ一つの場面が「地球の瞬間」として美しい一枚の写真に収められています。地球の偉大さや、生きることの悲しみや苦しみ、そして喜びを感じずにはいられません。

卒業生に贈る

この一冊

にあり、僕を明るく前向きにし、確実に生きやすくしてくれている言葉です。」とあります。彼のこれまでの人生を通しての思いも綴られています。生きるヒントがたくさんあると思います。

☆☆☆ 三年二組 西川雅則先生 『日本の思想』 (丸山真男著)

今年には戦後七十五年です。しかし、今は「戦前」かもしれません。この本に「私たちの社会が自由だ自由だと言って、自由である」ことを祝福している間に、いつの間にかその自由の実質はカラッポになっていないとも限らない。自由は置き物のようにそこに「ある」のではなく、現実の行使によつてだけ守られる、いかえれば日々自由になるうと『する』によって、はじめて自由でありうるということなのです。」という文章があります。

☆☆☆ 三年三組 川下優一先生 『プレゼンテーション』 (ガー・レイノルズ著)

著者は、プレゼンテーションの実施及び指導における世界的な第一人者で、アップル本社に勤務した経歴をもち、実は現在、奈良県に住んでおられます。私がプレゼン資料を作る際に参考

さか私達にも多くの示唆を与えてくれます。 ☆☆☆ 三年七組 栗本善弘先生 『心を整える。勝利をたぐり寄せるための56の習慣』 (長谷部誠著)

サッカー日本代表のキャプテンを長く務めた長谷部選手自身が書いた本です。スポーツに関わらない人にこそ役に立つ内容が多く、女性によく読まれているのも特徴です。本の中で、「愚痴だけではなく、負の言葉はすべて、現状を捉える力を鈍らせてしまい、結局は自分の心を乱すことになる。」とあります。乱れない心を作るために、心を鍛えるのは難しくても、自分を見つめる時間を作ったりして、心を「整える」ことが大事と言えます。全ては心の持ちようです。参考にしてみてください。

にしているバイブル本です。プレゼンの準備の仕方から、デザインのアイデア、実施のポイントまで、豊富な例と写真を交えて書かれています。これから先、学校や会社等でプレゼンをする機会がくるでしょう。美しく伝わるプレゼンで将来を切り拓いてみては？

☆☆☆ 三年三組 森崎瞳先生 『蜜蜂と遠雷』 (恩田陸著)

この原稿を書くにあたり、自分では中高生の頃何を読んでいただろうかと、思い返しました。たしか恩田陸さんが好きだった気がするので、せっかくのチャンスだと読んでみました。個人的には読書も人間関係も一期一会だと思えます。ぜひ10代の間に、一生お付き合いできる本や友人を手に入れてほしいと思います。

ちなみに、この本は昨年映画化された作品ですので興味がある人は一度どうぞ。 ☆☆☆ 三年四組 山崎杏奈先生 『いきもの人生相談室 動物たちに学ぶ47の生き方哲学』 (今泉忠明監修)

「Q. 人に流されず、自分らしく生きるにはどうしたらいいでしょうか?」

のよう自分らしく生きるヒントを探してみませんか?人は必ず、いいところを持っているものです。だから、一人ひとりがある宝物を大切にしながら、私だけの咲き方ができたら、それはとても幸せなことだと思います。

☆☆☆ 三年八組 長谷川僚太郎先生 『伝説の「どりの」』 (宮島英紀著)

東京の田園調布で「どりのの坂」なる標識を見つけた筆者は、「どりの」とは何かを調べ始める。当時はネット上にこの言葉はなかったろうが、筆者はあえてネットに頼らず、足を運び人に会って話を聞き、戦前から戦後にかけて発売されていたジュースであることを突き止める。ラストで講談社に保管されていた最後の一本にたどり着くくだりは、上質の推理小説を読んでいるような快感がある。説教臭い根性論がないのも好感が持てる。

☆☆☆ 学年係 松田加奈先生 『ブッタとシッタカブッタ』 (小泉吉宏著)

「ボク達はどうして悩むのか」「恋や他人との関係に悩むブタ、シッタカブッタが辛さの中から自分を見いだし、幸福と不幸、悲しみや悩みの正体を発見

すか?」「A. 自力で流れに逆らえないなら何かに頼ってもいいんです。」人間の相談に答えているのは、海の上で海藻を体に巻き付け、流されないようにして眠るラッコです。

人間はさまざまな悩みを抱きます。その悩みに動物たちがそれぞれの生態をもとに答えてくれる本です。読むと明日から前向きに生きるヒントを得られるかもしれません。

☆☆☆ 三年四組 松尾弘之先生 『聞く力をひらく35のヒント』 (阿川佐和子著)

阿川佐和子さんが連載している対談について書いた本です。経験談を基に、対談に「相手から聞き出すこと」をまとめています。前作の「聞く力」にも共通することですが、聞いた話をうすべらなものにするか、自分の糧にするかは自分次第であること。きちんと人と向き合い、相手の話を聞ける」ことが、人間関係だけでなく、人生を上手に生きていくことに繋がるとわかる一冊です。

していく旅をします。可愛いシッタカブッタのじたばたする姿を見ることで、悩みの対処療法ではなく、悩みの根を探し、心を柔らかにするための方法を学べると思います。

マンガといつてもあなどれない、「心」を語る本です。 ☆☆☆ 学年係 大森優理先生 『一流の人に学ぶ自分の磨き方』 (ステイブ・シーボルド著)

「一流の人と二流の人の差は紙一重だ」という主張から始まるこの本は、一流と二流を常に対比し、一流になるための実用的な思考・習慣・哲学を数多く紹介しています。二流の人は、なんとかがやつてやる」という言い方をしがちだが、一流の人は「これからますますよくなる」という言い方をよくする。一流の人は未来志向の言葉を使う。これは内容のほんの一部ですが、様々な分野において共通する一流の考え方がよくわかる一冊です。

さか私達にも多くの示唆を与えてくれます。

☆☆☆ 三年七組 福谷智志先生 『ことばへの旅』 (森本哲郎著)

日頃私たちが何気なく使っている言葉。そんな言葉の中には思ってもいなかった深い意味が込められていることがあります。著者は、イソップ・ブッド・ゲーテなど古今東西の様々なジャンルにおける賢人たちの言葉を選び、その深い言葉の森に分け入りまして『希望について』『絶望について』等それぞれのテーマは、一つ一つの金言をもとに平易な言葉で具体的に語られています。その独自の解釈、教養・思索の深

品位は、ちょっとだけの無理から生まれる。年八十八歳で生涯を閉じられた女優が綴るシンプルにして深遠な美しい歳の重ね方から装い、人間関係、大切にしたい言葉、生き方まで。女性の視線から考える、野に咲く花

にあり、僕を明るく前向きにし、確実に生きやすくしてくれている言葉です。」とあります。彼のこれまでの人生を通しての思いも綴られています。生きるヒントがたくさんあると思います。

☆☆☆ 三年二組 西川雅則先生 『日本の思想』 (丸山真男著)

今年には戦後七十五年です。しかし、今は「戦前」かもしれません。この本に「私たちの社会が自由だ自由だと言って、自由である」ことを祝福している間に、いつの間にかその自由の実質はカラッポになっていないとも限らない。自由は置き物のようにそこに「ある」のではなく、現実の行使によつてだけ守られる、いかえれば日々自由になるうと『する』によって、はじめて自由でありうるということなのです。」という文章があります。

☆☆☆ 三年三組 川下優一先生 『プレゼンテーション』 (ガー・レイノルズ著)

著者は、プレゼンテーションの実施及び指導における世界的な第一人者で、アップル本社に勤務した経歴をもち、実は現在、奈良県に住んでおられます。私がプレゼン資料を作る際に参考



図書館文化講座報告

第一回……「本の題名を考える会」(R元・6・21 大会議室)
第二回……「名作をいじる読書会」(R元・11・22 図書室)

第一回

本の題名を考える会
図書館の本棚を眺めると『星の王子さま』『砂の器』など、二つの単語を「の」でつないだ題名の本が、数多くあることに気づきます。それらの題名をバラバラにしてもう一度「の」でつなぐと、『星の器』『砂の王子さま』のように、全く違う印象の本の題名ができます。言葉遊びのような面白さがあり、今回は、本の題名を組み合わせて、オリジナルの本を想像する「本の題名を考える会」を行いました。
まず、本の題名をバラバラにした二つの語群から好きな単語を一つずつ選び、その単語同士を「の」でつないで本の題名を創作します。次に、創作した本の題名のジャンルやあらすじ、登場人物などをワークシートに書き込んでいきます。この作業は一人で行いますが、参加者同士で相談する様子もあり、真剣に書き込む姿が見られました。
ワークシートが完成したら、自身の創作した本の題名について意見交換の場を持ちました。ある班では、『カモメのジ

ヨナサン』の「ジヨナサン」を人物と捉えて、彼が様々な場面で活躍をするシリーズを創作し、参加者の笑いを誘っていました。

まために、国語教諭の長谷川先生より、語群で使用した本の紹介と、自分で今回創作した本の続きを書いてみたら面白いのでは、と創作のアドバイスがありました。

第二回

名作をいじる読書会

名作と呼ばれる小説は難解なものが多く、途中でギブアップしたことがある人は多いのではないのでしょうか。名作に親しみを持ってほしいと考え、東大の阿部公彦教授が考えた「らくがき式」という読書法を実践する「名作をいじる読書会」を開催しました。

「らくがき式」という読書法は、名作の冒頭一ページを読みながら、気になった箇所に線を入れたり、ツツコミのコメントを書き入れたりするという読書方法です。そうすることで作品に親しみが生まれ、小説を読む前の準備運動のような効果があるそうです。



今回は芥川龍之介の『鼻』と太宰治の『斜陽』の冒頭一ページをコピーしたプリントを用意し、読みたい作品を選んで、挑戦してもらいました。一人で「らくがき」をしたあと、同じ作品を読んだ者同士で集まり、拡大したプリントに再度、グループで「らくがき」をします。文章から受けたイメージや場面を視覚的にするため絵を描くなど、様々な「らくがき」がありました。
終わりに、国語教諭の本田先生より作品の解説がありました。その中で、「世界は言葉でできています。いろんな本に出会って、言葉を知って成長してください」と、励ます言葉が印象的でした。

編集後記

今年はかなり暖冬であり、二月になった今日も外気温が十三度という暖かさである。立春を迎え、暖かい冬でもやはり、「春」を待ち望む毎日である。

春の語源には、天気「晴る」、草木の芽が「張る」などの諸説があるが、英語のSPRINGの方がかなり躍動感に満ちあふれている。SPRINGの語源は「突然湧き出る」、そこから「地面から急に水が湧き出る」ことや「飛び跳ねる」ことへと繋がりに、「泉」や「ばね」を意味するようになる。さらに「芽が吹き出る」ことから草木が芽を吹く季節「春」を意味するようになったらしい。「春」といえば、先日の朝の読書の本を探し求めている時に見つけた詩集の中に谷川俊太郎の「はる」があった。「はなをこえて しろくもがくもをこえて ふかいそらが(略) はるのひととき わたしは かみさまと しずかなはなしをした」

全てひらがなで書かれているせいもあってうららかなおぼろげなイメージがあるが、一方で、「かみさま」が登場するこの詩には目に見えない「太陽」のエネルギーを感じとれる。実は、今この瞬間にも周囲には弾けるようなSPRINGが溢れており、立ったり座ったりする動作時に生じる椅子のSPRING、

ING、今こうしてパソコン作業をしている時のたたいてもたたいても押し返してくるキーボードのSPRING、手にしているマウスの中で電池を支えているのもSPRINGだ。目の前にあるクリップ、ボールペン、時計、電化製品、自転車、自動車、鉄道車両、もう私たちの日々の暮らしはもはやSPRINGの弾けるエネルギーなしでは考えられない。

谷川俊太郎の「はる」を読めば読むほど、春のひと時に神様と話をすることで心のSPRINGに助けられているのかもしれないという気になってきた。もし、心の中にSPRINGがなかったら、私たちは些細な失敗や悲しみからすら、立ち直ることができない。絶望のどん底でべしゃんこに押しつぶされても、日々、私たちはいつの間にか立ち上がりつつある。

神様は、人間の心の中にSPRINGをそっと仕込むことも忘れなかったんだ。SPRINGとは、春とは、そういうものなんだ。

朝の読書によって与えられたわずかな十分足らずのお陰でSPRINGを待ち望む気持ちちはますます、大きくなり、本を読んでいる生徒を見ながら暖冬の青空を見上げた。

(文化図書部長 高津)

